

LEADERSHIP CHALLENGE

大隈塾 LC レポート vol.02

第2回大隈塾リーダーシップ・チャレンジは5月7日（土）8日（日）、鴨川自然王国で田植えを行いました。今回の目的は、

- (1)チームビルド
- (2)自然に触れ、五感を取り戻す
- (3)食に関して考え、食べ物の自給力をつける
- (4)ゆったりとした時間を過ごす

にありました。

大隈塾の四つの特徴である、

「ソーシャルネットワーク」

「哲学、信念、世界観」

「リーダーシップ」

「心技体」

のうちの「心技体」にあたります。

知識と経験の量に反比例して、体力と五感が衰えていきます。自然の中で、水と空気と土に触れながら、もともと備わっている感覚を取り戻し、左脳（＝論理性）と右脳（＝直感）と体幹を鍛え、闘うビジネスパーソンとしてのバランスを整えます。

5月7日（土）

ワークショップ：田植え

テーマ：チームビルド

10:30 に東京駅八重洲口に集合し、専用バスに乗ってアクアラインを通過して鴨川へ。「日本棚田百選」に選ばれている大山千枚田を左に見ながらさらに山を登り、12:00 ごろに歌手の加藤登紀子さんが運営する鴨川自然王国へ到着。山小屋に荷物を置き（女性はログハウス）、着替えを済ませて持参した昼食を、これから苗を植えていく田んぼを眺めながら食べました。

学部の大隈塾ゼミの学生たちも合流し、総勢 30 名ほどが準備完了。かなりぎこちなく水田に足を突っ込み、よろよろしながら態勢を整え、王国の藤本博正さんと首藤武宏さんのご指導で田植えを始めました。

最初こそゆるやかなペースでしたが、次第に慣れてくるに従い、苗を植えていくともスムーズに動くようになり、40分ほどで小さめの田んぼでの田植えを終え、休憩を挟んでおよそ2倍、一反ほどの田んぼに挑戦。リーダーシップ・チャレンジの社会人受講生とゼミの学部生たち30人が横一線に並んで田植えをする光景は壮観でした。

ちなみに作業面積は1反5畝、およそ1500平方メートル。

成果予定は9俵=540kgのコメになります。1人あたりのコメの年間消費量は約60kgですから、9人分にあたります。

夜はバーベキュー。気温も落ちてかなり寒くなったので、焚き火を囲んで丸太の椅子に座り、お酒を楽しく飲みながら王国産の肉や野菜を焼いて食べました。

【受講生のレポートより】

学生を目の当たりにして、社会人の（日々の疲れもあると思うが）体力のなさを痛感。また、学生の熱いハートを思い出し、自分自身見つめなおす部分もあると共に、元気のある若い人達にも希望が持てた。

労働の後ということもあるが、それ以上に、全て自家製という自然から直の食事というのがあんなに美味しいと思わなかった。改めて、日々普通に食べている「食」のありがたさを痛感した。

=====

たった3時間ほど田植えをただけだったが、多くの体力を必要とする作業であった。しかしながら田植えというのは稲作における極一部のプロセスでしかないわけで、農家の方々はそれ以外のプロセスに膨大な時間と労力を費やし、我々の食卓に米を届けてくれている。田植えを経験することで、苗から私たちの口に届くまでのプロセスや、その過程で起こり得る災害や農家の方々の苦労等が想像でき、月並みな感想かもしれないが、食の大切さについて改めて考え直す良い機会となった。

=====

最初に土に足を入れたときの感触があまりに新鮮だった。その後も足の裏の感覚を意識しながら土を踏みしめるにつけ、普段、いかに手の感覚に偏って生活しているかを実感した。手の感覚に偏って前に進もうとすると腰が引けるし、体勢が安定せず、とっさの身動きが取れない（機敏性に欠ける、リスク回避ができない）。

=====

最初のうちは一体感⇒徐々に個人プレー（小さな集団毎のプレー）⇒最後はまた一体感
初期は良くわからないので皆指示に従っていた。皆自分の頭で判断はせずに作業をしており、暗黙的に強制された一体感がある。

その後、中盤になりだんだん作業に慣れてくると自分の頭で判断し作業をするようになる。従うべきところ・ルールにそって実施すべきところと、好きにやっていいところがわかってくると、個人・小集団の単位で作業量・作業内容に差が生まれ、徐々にラインが崩れてくる。

終盤では、強制力が薄れ一体感が無くなりつつあったラインに、作業の終盤になると自然発生的に新たな一体感が生まれる。これはゴールの共有（あと数ライン植えたら終わりという共通の目的）によるものであると気づいた。

=====

チームビルドと聞くとピラミッド型のチームを作るイメージしていたが、研修のチームは円型もしくはライン型のイメージ。

今回の田植えのようなチームの場合、サボる人はいても人より成果を上げようとか、人を出し抜こうという発想は生まれにくい。一体感を持ったチームを作るのに必要な要素は、皆が平等に争いなく享受できる成果なのかもしれないと感じた。

=====

翌日に気が付いたのだが、我々が田植えをした田んぼを見た際に、個人ごとの列によって歩幅や稲の間隔、おそらく実際に植えている本数等も異なっており、複数のメンバーが関与するプロジェクトで成果を出すには、メンバー間の認識を合わせ、スキルを考慮した計画を立てることの重要性を改めて認識した

=====

5月8日（日）

翌朝は7:00から、近くの「がんこ山」（通称）に。20分ほどで頂上に到着する超ミニ山登りです。頂上はほんの一人分の広さしかないため、交代交代記念写真を撮っていました。

下山しての朝食は、信じられないくらい大食になっていました。朝からの運動がそうさせたのか、あるいはシンプルにコメが美味しかったのか。ご飯茶碗3杯はみなさん食べていらっしゃいました。

9:00からはジャーナリスト高野孟さんの講義「なぜ裸足で田んぼに入ると頭が良くなるのか」。山小屋の畳の上に座って寺子屋スタイルでの講義では、泥の中に足を突っ込む意義、足の裏は脳に直結しているため裸足で田んぼに入ると脳を刺激して五感と取り戻すことが出来やすい。また、「農」と「農業」との違い、日本列島に住む人々が「農」とともにあった歴史、文化、風土などを振り返り、今いる自分たちの立ち位置とこれからの進路を考えるきっかけとなりました。

講義・ディスカッション

講師：高野孟氏（ジャーナリスト、鴨川自然王国）

テーマ：「なぜ裸足で田んぼに入ると頭が良くなるのか」

田植えの時に私が若い人たちに言うのは、「裸足で田んぼに入れ」ということである。ふつう都会人の皆さんにはゴム底の「田植え足袋」を履いて足裏を保護するようにして貰うのだが、実はそれでは田植えの面白みは半減する。

この辺りの田んぼの土は独特の重粘土質で、水を張った田に足を踏み入れると、足先は踝の上までヌルヌルズルズルと潜って、水が膝上 10 センチくらいまで来てしまう。次の一步を踏み出すのは簡単ではなく、腹筋に力を入れて体のバランスを確保しながら、足首を真っ直ぐに伸ばして踵の先から騙し騙しスーッと抜かないと上手く抜けない。毎年必ず、それに耐えきれずにバッシューンと尻餅をついて、せっかく植えた苗を台無しにする奴がいる。

しかし慣れてくれば、5月といえども水はまだかなり冷たいけれどもその底の土はほんのりと温もりがあり、何とも言えず親しみのある感触であることが足裏で感じられるようになる。その温もりや親しみは何かと言えば、生命の源である「土」の神秘のパワーである。

私が尊敬する山形県長井市の養鶏農家の菅野芳秀は、よく小学生に話をする時にこんな風に「土に寄せる百姓のロマン」を語る。

「私の右手には土、左手には砂がある。土は軟らかいし、香りがある。砂は硬く、香りが無い。土には砂にないぬくもりがある。土と砂を分けているものは、植物や動物たちの遺体が含まれているかどうかんだ。そう、土は今までこの地で生きていたものたちの遺体の集合体なんだ」

「岩に最初に棲みついたのはコケのようなもので、それが朽ちて少しの土が出来て、その何千回、何万回の繰り返しのなかからやがて草や木ができ、動物たちが生まれては次々に遺体となって土に還った。タヌキもいた、カモシカもいた、森に野草取りに行行って行方不明になった婆さんもいただろう。数十センチという土の層は、数万年、数億年という歳月をかけた、生きていたものたちの集積なのだ」

かつて生きたもののすべてが微生物の働きで分解され、朽ちて、土となる。一握りの土には 10 億匹もの微生物が生きていて、彼らが数万年、数億年を経たかつて生きたものたちの遺産の現役の継承者である。だから土は命の源であり、足裏に感じるのはその温もりなのだ。

●足裏感覚の喪失

土の生命力を感受するにはいろいろな方法があるだろうが、私は足裏が一番だと思う。

人類の祖先が約 500 万年前になぜ直立二本足歩行を始めてヒトになったのかの理由はよく分かっていないようだが、ともかくもそれ以来ずっと我々は足裏で土と接して、地面に踏ん張って生きてきた。

「人間だけが足の裏を持つ。立つことはすべての動作の基本であり根源である」と、平沢彌一郎は言う。だから「98%の子どもは健康な足で生まれてくる」のだが、残念なことに「60%の大人は足に障害を持っている」と、清水昌一は嘆く。

ベアフットランという、素足に近い平らな極薄の靴で走る長距離ランニングのスタイルがあって、その宣教者である四角大輔という人がこう言っている。

「人類の歴史の大半は裸足だ。人間の体は裸足で走るように出来ている。靴の過剰なサポート機能は、ぼくらの足と体を弱体化させ“不自然な状態”にしてしまったのだ。これは、自然から切り離され、太古の感覚を失っている現代人の病理にも似ているように思う」（13年10月5日付朝日）

同じ頃の別の新聞にも「かけっこに中年からでも速くなるには、足の運びを裸足で練習するのがよい」という記事が載っていた。

「現代人はクッション性の高い靴に慣れて体本来の機能が衰えている。裸足になることで、走るときの衝撃吸収機能などを体を取り戻し、けがを防げる場合がある」（13年10月12日付日経）。

そこで重要なのは、「足は、手と同様、運動器官であると同時に感覚器官」であることである。「大地を裸足で踏んだときの触覚・圧覚などは、足の皮膚・筋肉・腱などにある感覚の受容器をとおして中枢神経に伝えられ、この情報は脳の運動野からの調整の再命令として足の筋肉に送られて、足の運動はうまく続けられる」という、近藤四郎が主張する足裏と脳との連動性である。

足裏は脳と連動する。しかし手の平もまた感覚器官であるから、手で土を感じるのも悪くない。あるいは、泥浴びに飛び込んで全身で土を受け止めるのも、もちろんいいだろう。

●脳に頼りすぎる弊害

どうも今どきの若い人たちは、「脳」に頼りすぎて小賢しくなって、腹の底から湧いてくる動物的本能とか、止むに止まれぬ感情の爆発とかに従って闇雲に行動することが少ない。ところがそれは実は、本当の意味で脳を大事にしていることにならない。なぜなら、脳にもまた数億年に及ぶ生物進化を反映して、

- ・爬虫類脳 = 反射脳
- ・哺乳類原脳 = 情動脳
- ・新哺乳類脳 = 理性脳

の3層構造になっていて(写真 <http://bit.ly/1UqKKtz>)、本来はそれら3つの脳がそれぞれに役割を發揮してこそ脳力が全開するのであるけれども、そうならず「理性脳」ばかりを偏重して他の2つの脳を退化させてしまっているのが、今日の文明の病である。

米国の脳科学者＝ポール・マクリーンは、理性脳の言語機能や論理的思考に過大な期待を寄せて袋小路に陥ったのが現代であり、理性と感情と本能の「三位一体脳」の復元によってそこから脱出すべきことを提唱する。が、実際にどうすればそれが可能かについては語っていない。

私に言わせれば、言語機能を持たない情動脳と反射脳を、言語機能を持つ理性脳で考えて活性化させようとしても無理な話で、まずは足裏から初めて内臓感覚を蘇らせて、そうすれば、腸から沸き起こる様々な「心」が余り使われずに錆び付いていた2つの非言語的な脳を揺り動かすのではないかと思う。

●インテリジェンスの三角形

頭がいいということはどういうことか。私は、「インテリジェンス」を身につけることだと思っている。インテリジェンスは、さし当りは「知性」とか「知恵」とか訳すことができる。

近年、安倍政権のありようを巡って「反知性主義」ということが盛んに言われるが、その特徴は、歴史の事実や世界の事情についての一知半解な知識を自分の都合のいいように歪曲して憚らない論理性の欠落、周りから見たら自分の言動がどう見えるかへの想像力の欠如にあるのではないか。

知性を持つインテリゲンツィアになろうとすれば、まさにその正反対の確かな論理力、しなやかな想像力を鍛えなければならないが、それだけでは足りず、もう1つ、鋭い直感力を備える必要がある。ジャーナリストに限らず、仕事をする人は誰でもこの三角形をぐるぐるんと回転させながら思考し、企画し、表現し、他人を動員するということをしているはずで、それを頭と心と体の三位一体と呼ぶこともできるだろう。

このうち論理力は、例えば問題意識を持って読書をしたり仲間と議論したりすることを通じて自分で鍛えることができる。

想像力を鍛えるのは少し難しく、私が勧めるのは、地図帳や地球儀を眺めて見知らぬ土地の人々の暮らしに思いを馳せるとか、歴史書を繙いて時間を越えた人間の真実に迫るとか、まずは地理的＝空間的、歴史的＝時間的に自らの精神を自由に浮遊させる、時空超越の遊泳術を覚えることである。例えば、学校で教えられる日本歴史と日本地理についての固定観念を数秒で転覆させて自らを解き放つには、この2枚の図を並べて見るだけで十分だろう。

ところが直感力というのは難しく、体で覚えるしかない。高橋源一郎がどこかで「今の若者がクールで熱くならないのは、体を使っていないから。心は体で作るので、体が知らないと心は納得しない」と言っていたが、その通りで、そのためには体ごと「本物」に接して全身で

感じ取る体感経験を積むことである。

●ジャーナリズムの方法

直感力というのは「第六感」、ヒラメキで、これは論理力を無視するし想像力さえも飛び越える、何やら動物的な働きである。

しかし、これだけはハッキリしているのだが、五感がフルに活性化していなければ第六感などひらめく訳がない。そこでまず、五感の中で視と聴に比べて不当に貶められている味・触・嗅の感覚を磨くことが必要である。

例えば「賞味期限」表示を盲信して、それを1日でも過ぎたら捨てるといったことを止めなければならない。人間は太古から自分の視覚・嗅覚・味覚を動員してそれが食べていいものかどうかを判断していた訳であって、それをしなくなればたちまちそれらの感覚は退化する。私は、表示を1カ月過ぎた納豆でも、半年過ぎたチーズでも、1年過ぎたうどんでも、自分で大丈夫と判断すれば食べて、今まで一度たりともトラブルに遭ったことがない。

嗅覚は特に退化が著しく、そう言えば最近使ったこともないなあという人も多いのではないかと。ソムリエの田崎真也は「1日1回、何でもいいから真剣に臭いを嗅いで香りを吸い込みなさい」と言っていた。同様に、触覚も意識して使わなければダメで、それには裸足で土を踏むのがたぶん早道である。

さて、そのようにして直感力が増してきたとして、ジャーナリストの仕事を一例とすると、現象レベルの情報（インフォメーション）の海を泳ぎ回りながら、その中で「あれ？これは何だ」「ウン、この分析は鋭い」「待てよ、これは何だか前に見たことがある出来事だな」「下らん話だ」とか、瞬間的に見分けて行くのは直感力の働きである。

そこでインフォメーションの海から釣り上げたいいくつかの素材やヒントを、整理、比較、集合、類推、関係、優先順位づけ、鳥瞰・虫瞰等々いろいろな操作を加えながらその問題の実体構造を1枚の絵に収まるように描き上げていくプロセスが大事で、そこでは想像力が思い切り発揮されることになるだろう。そこを煮詰めて行った末に、「ん？この問題の核心はここだな！」という極点に到達すると、そこを起点にしてこの問題を語るにはどういう見出しで、どういう書き出しで、どういう順序で論旨を組み立てるかという論理構成が決まってくる。この「核心はここだ！」にたどり着いていくプロセスがインテリジェンスである。

これは決してジャーナリスト独自の方法ではなくて、政治家にせよ経営者にせよ市民運動のリーダーにせよ、何かしら人々に影響を与えて世の中を動かそうとする人たちにとっては共通のインテリジェンスの技法である。

という訳で、田んぼに裸足で入ると、まず触覚が蘇って、五感が働き始めるきっかけが生ま

れる。五感が働くと「第6感」もひらめき易くなり、直感力が増す。その一方、足裏は内蔵と直結しているので、「内臓感覚」が刺激される。内蔵は発生的に脳の上位にあるので、内臓脳が働くと頭脳も元気になり、想像力も論理力も向上するのである。▲

【受講生のレポートより】

私たちは、いつの間にか五感を退化させていることを認知し、五感を働かせるような機会を増やさなくてはならないと感じた。

五感を働かせ刺激し、本能と感情が湧き出てくることで、アツく、一緒にいるとワクワクする、周りに良い刺激を与えられるリーダーになることができるのではないかと思った。

少なくとも、田植え～労働の後の食事・お酒、自然の中の散歩と、普段の生活の何倍も五感が刺激された後に、チームメンバーとの勉強会では、言葉で伝えられる事以上に、体験してきたことの面白さを伝えることができたと思う。

=====

Information の山をいかに intelligence に加工していくかという話には大いに共感しました。情報 の山を探っていく中でどれが重要かという「勘」は今の仕事をしていても大切であると感じます。ただ「なぜ」ということを他の人たちに納得させるにあたって勘を伝えるのは難しく、どうしても論理の組み立てばかりに注力してしまっているのが現実であると感じます。

五感のセンサーを磨くとともに、いかに自分のインスピレーションを他人に伝えるかについても、自らのコミュニケーションスキルの一つとして高めていきたいと感じました。

大隈塾リーダーシップ・チャレンジレポート vol.02

2016年5月27日発行（通算23号）

大隈塾事務局（一般社団法人ストーンスープ）

村田信之 mura@ta2.so-net.ne.jp

169-0051 東京都新宿区西早稲田 1-9-19 アーバンヒルズ早稲田 207

tel:050-3558-7527 mail:ookuma_school@stonesoup.tokyo